【フロアディスカッションでの質疑概要】

■質問 1：学生の成長と感じた場面や様子

・回答 1-1：首都大学東京

西村氏「基本的に、うちの寮は 1 年 2 年生が入寮し、3 年になると出ていく訳ですが、今年度は3名がオブザーバーとして3年生まで残っているという話をしました。寮の中にいるのですが、彼等は、普段あまり何もしません。例えば、イベントがあったり、セミナーがあったり、全体会議をする時に、自分達の気付いたことを寮生やコアのメンバーが発言します。それは、いわゆるクレームであったり、注意であったり、たくさんあります。私などが見ていて、少し文句を言いたいこともあるのですが、教員がそれに対して言うのは、あんまり良いことではないと思っています。基本的には我慢する方が良いだろうと思いますが、オブザーバーの 3 年生は、私が言って欲しいということを、2 年の経験をベースに、学生達に強引ではなく、同じ目線で話をしてくれます。それを聞いていると、やはり随分成長しているなと思います。オブザーバーは、学生達が残って欲しいという学生でもあるし、残っても良いという学生達ですですから、そういう意味では、元々素質があるのかもしれませんが、それなりの経験をベースにして色々1、2 年生達に発言してくれる時は、やはり成長しているなと感じます。」

・回答 1-2：京都産業大学

渕上氏「女子寮である葵寮生の例を挙げさせていただきます。1、2 年生が生活しており、特に、2 年生がリーダーとなって生活していますが、4 月、5 月、6 月と 5 件の無断外泊が起きました。親御さんから預かっているという気持ちがあるので、何かあったら大変なことであると、我々としては、無断外泊について重要視しています。この時、寮生活を 1 年経験した 2 年生、班長ですが、この状況は良くないと、寮を良くするためにはきちんとルールを守らないといけないとして、我々学生寮のスタッフに、まず、班長会議を開いて、このことについて話し合いたいと言ってきました。その時には、私も参加しましたが、班長会議では、こういうことが起こったらペナルティーを与えるべきではないかなど、いろんな意見が出てきました。我々に詰め寄って来る場面もありましたが、そういう議論を十分にしたあと、最終的には、2 年生達が 1 年生を全員集め、ルールの大切さ、ルールを破った場合どんな迷惑がかかるかということを話し、注意喚起をした訳です。注意喚起をするにあたり、班長達が文章を考え、A4 用紙 3 枚位にびっしり書いたものを持ってきて、これをみんなの前で言いたいと言ってきました。1 年間寮にいて、3 ヶ月の班長の経験でこんなに変わるものかと、それが、私としては、非常に驚き、嬉しく、成長を感じた点です。」

・回答 1-3：立命館アジア太平洋大学

松本氏「本学の事例としは、RA の活動が挙げられます。彼等が活動を通して色々なスキルを身に付けていることを、寮の担当をしていて肌で感じています。もう 1 つ、特に、日本人学生は引っ込み思案、消極的な学生が多いのですが、自己主張をしないと自分の考えが通じない、多国籍の中で生活をしているため、1 年間寮生活をすると、自ずと積極性や行動力といったものが身に付くと、肌で感じています。特徴的な事例として、平和交流ツアーに参加した学生が、平和についてすごく興味を持ち、ボツワナに交換留学で行きました。そこで、ぜひ、日本の戦争状況を紹介したいと考え、現地の大使館に写真展を実施したいという交渉をして、最終的に実現したという事例があります。そういう行動力が、寮生活の中で培われたのではないかと思います。」

・回答 1-4：お茶の水女子大学

桂氏　「寮生の成長を一番感じたことは、昨年度から今年度にかけて、1年生が2年生になった際に、意識の持ち方が随分変わったということです。昨年度は、開寮1年目ということもあって、何をしたら良いか分からない部分が多く、ハウス長も、日常の色々な問題にどう対応したら良いのか分からないということが多くありました。そのため、学寮アドバイザーに相談に来ることも多く、活動が受け身になりがちだったのですが、1年を経て、1年生が2年生になり、1年生を迎える立場になった時に、「自分達でSCCを良くしていきたい」、「私達で何かやろうよ」という声かけを積極的にするようになりました。1年間の寮生活の中で、感じたことや考えたことを、今年度、色々な形で発揮しており、主体性が出てきたと感じています。」

■質問2：学生寮に関する教員と職員との行動のあり方、それぞれの役割について

・回答 2-1：首都大学東京

今関氏「学生課長の立場から発言させていただきます。現在、桜都寮の運営に関して、教員で関わっているのが、副センター長の西村先生だけと言っても過言ではありません。そのため、事務方が全ての寮生の相談に乗り、運営に関してのアドバイスもしています。もう少し教員の方々にも関わってもらい、学生が社会に出た時に、より良い活動、社会を引っ張るように成長をするためのアドバイスを先生方からもしていただくと、もう少し運営がうまくいくのではないかと思うことも度々あります。」

・回答 2-2：お茶の水女子大学

桂氏　「本学では、教員と職員が連携して寮の対応にあたっています。教員と職員の役割の違いとして、教員は、寮の教育的機能を高めるため、教育支援の理念を考え、それに基づいて寮生にどんな教育ができるかを検討して、実践する役割を担っています。具体的には、学生支援プログラムのような支援体制を作り、学習面だけではなく、人間形成といった側面でも、寮生活を通じて成長し、自立的な学生になって欲しいと考えています。一方、職員は、寮の運営、特に財政面や寮の規程作成等を主に担当しています。ただ、実際に寮生と接する際には、教員も職員も一緒に関わっていることが多く、特に役割における違いはないと思います。」

■質問3：京都産業大学学生寮の厳格な規則にこだわる理由

・回答 3：京都産業大学

渕上氏「私が説明時に、規則という言葉を多く発したため、非常に管理がきつい寮ではないかというイメージを持たれたかもしれませんが、基本的には学生主体の寮です。ただし、集団生活や社会生活の中にはルールがあるように、寮生活においても最低限のルールがあります。また、1年生対象の寮であるため、1年後には退寮して、1人暮らしをすることになります。主体的、意欲的に大学生活を送るためにも、1年生のうちに生活習慣をきっちり身に付け、生活基盤をしっかりするという意味でのルールです。特に、管理するためのルールという訳ではありません。その点は誤解のないようにお願いしたいと思います。」

井上氏「ルールといっても、やはり団体生活をしていますから、朝何時に起きましょうよ、いつまでに帰って来ようよ、というような日課的なルールですから、それほど、縛って縛ってというようなものではありません。団体、集団生活を行う上での最低限のルールを守ってくださいという程度のものだと思っています。」

■質問 4：お茶の水女子大学の SCC サポーターの立場と関わりのきっかけ

・回答 4：お茶の水女子大学

瀬田氏「私は、今回初めてお茶の水女子大学と関わらせていただいた訳ではなく、2006年からサークルのリーダー研修を担当しており、その際に、学生寮担当の職員の方と御縁がありました。そして、私がコミュニティ作りを専門にしているチームビルディングという会社に勤めていることもあり、企業と大学という違いはありますが、学内の桂先生とは異なる視点でコミュニティ運営を活性化させることができるのではないかということで、お話をいただいたのがきっかけです。桂先生は、学生達にとってお姉さん的存在で、学寮アドバイザーとして活躍されていますが、「大学側に言ってもしょうがない」と取られてしまう時もあるため、大学の人間ではない者になら、言えることもあるのではないかと考えています。そして、寮生の意欲や気持ちをできる限り引き出せるように働きかけています。例えば、桂先生も含めて、フレンチトーストを焼きながらざっくばらんに話せる朝の会を作るなど、できるだけ寮生と会う機会を増やして、寮生の関わりを活性化できるように取り組んでいます。」

■質問 5：班長、RA のモチベーション向上策と効果的なインセンティブとは何か？

・回答 5-1：首都大学東京

西村氏「桜都寮の場合は、班長はいません。先ほど申し上げましたが、運営組織のどれかの部に全員が所属し、その上に部長がいて、その上に代表、副代表がいます。そういう組織単位で動いていて、その上にオブザーバーとして 3 年生が 3 名います。そういう意味では、RA の役割は、たぶんオブザーバーが担っているのだろうと思いますが、オブザーバーは基本的にオブザーバーであり、組織単位は 1、2 年生が主体です。それは、オブザーバーも十分認識しているため、過度な介入ということはあんまりやりません。全体会議での注意事項にしても、考えさせるような言い方をしていますから、そういう意味では、桜都寮の場合は、かなり自主的な動きができています。学生課は、それを包括的に見ているというイメージです。」

・回答 5-2：京都産業大学

渕上氏「班長の募集は、1 年間寮生活をした人に対して行います。今学期の場合、追分寮では 12 名のところ、23 名の応募がありました。葵寮の場合は、12 名のところ、21 名の応募がありました。何故こんなに応募があったかというと、やはり、1 年生の時に 2 年生の姿を見て、こんなにも私達を支えてくれているという感謝の気持ちと、先輩のようになりたいという気持ちが非常に大きいからだと思います。実際に面接した時、何故あなたは班長になりたいのですかと聞くと、そういった答えがたくさん返ってきました。良い伝統になっていると思いますが、このことはインセンティブにはならないかもしれませんが、彼等のモチベーションにはなっていると思います。また、1 年生が成長する姿、1 年生の喜ぶ姿を見て、班長達は楽しそうにしている姿もよく見かけますし、そういったことにも、やりがいを感じていると思います。これが、インセンティブという答えになっているかどうかは、分かりませんが、そういうふうに感じています。以上です。」

・回答 5-3：立命館太平洋大学

松本氏「京都産業大学さんと同じく本学でも、気持ち的なところが大きいと感じています。本学では、国際学生が学生寮に入寮する時に空港まで出迎えに行くサービスを、開学以来していますが、初日は心細い中で、ひどいホームシックになっ

たりもするのですが、そこで、ニコッと笑っておにぎりなどを出したりすると、優しく迎え入れられた、ほっとするという経験をします。自分達も先輩になったら、後輩に対してサポートしてあげたいという思いが、良い循環に繋がっているのではないかという感想です。金銭的なところでは、奨学金という形で、RA には月 2 万円を支払っています。ただ、2 万円が高いか安いかというと、たぶん、彼等自身は安いと感じているのではないかと思うため、気持ちの面が大きいと感じています。」